

マンリィ・ラブの二つの顔：
『ジョゼフと友達』における戦略的欺瞞

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本合, 陽 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008879

マンリィ・ラブの二つの顔 — 『ジョゼフと友達』における戦略的欺瞞

本 合 陽

ホモセクシュアルの「心理学的・精神医学的・病理学的範疇が成立した」年とフーコーが名指した1870年、¹ 一冊の小説が一人のアメリカ人の手によって書かれた。ベイヤード・テイラーの『ジョゼフと友達』である。² あまり注目されることのないこの作品を取り上げ論じるのは、作品に見られる混乱にととも興味を惹かれるからだ。当時の時代背景と照らし合わせると、作者と作品の関係が見えてくる。同性間の愛情を十分に描くと見せながら、結末では意外な結婚を暗示するのだが、これは作者自身のなかでの混乱の結果なのか、それとも作者の仕組んだ意図なのか。

今でこそ忘れられた作家であるが、テイラーは当時「金めつき時代の桂冠詩人」と称され、旅行記の作家としても、相当の人気作家であった。彼はその勢いにのり、小説も書いたが、『ジョゼフと友達』が小説としては事実上最後のものと考えても良いだろう。

バーン・フォーンがホイットマンの研究書のなかで、興味深い事実を指摘してくれている。

In a notebook entry in 1854, Whitman said that Bayard Taylor's poems "have as attributes what might be called their psychology — You cannot see very plainly at times what they mean although the poet indirectly has a meaning" (*NUPM*5: 1771). "Indirectly" indicates a special literary tongue, and this term is a definition of the constantly engaged and experimental discourse concerning the theories, practice, and implications of living a homosexual life that is part of Whitman's special tongues. Taylor's indirect meanings and his "psychology" deal with that same manly friendship Whitman hoped to see mentioned in print.³

男同士の愛を歌う詩人として、エドワード・カーペンターを始め、多くの同性愛傾向のある人々を惹きつけてきたホイットマンが、テイラーに同じ傾向を見いだしている。ホイットマンが男性同士の愛情や、男性の肉体的な魅力を歌ったのは事実だとしても、露骨な表現でそういった主題を歌えたわけではない。テイラーの詩の中の「間接的」な面を指摘しているが、ホイットマン自身同じ側面を持っていた。テイラーの小説『ジョゼフと友達』は、一見相矛盾する方向が共存していると述べた。その矛盾と、この「間接的」との関係。私がこの論文で明らかにしようと思うのは、この点である。あまり知られていない作品なので、簡単な粗筋から始めよう。

I

主人公ジョゼフは孤児であり、親から譲り受けた農場に叔母のレイチェルと共に暮らしている。彼は自分のことをうまく表現できず、また自分のことを客観的に理解しているとは言えない少年だ。ジョゼフの性格を定義している箇所を引用しておこう。

Joseph Asten's nature was shy and sensitive, but not merely from a habit of introversion. He saw no deeper into himself, in fact, than his moods and sensations, and thus quite failed to recognize what it was that kept him apart from the society in which he should have freely moved. He felt the difference of others, and constantly probed the pain and embarrassment it gave him, but the sources wherefrom it grew were the last which he would have guessed. (22)

そんな彼にも気心の知れたエルウッドという友人がおり、また密かにルーシーという少女に恋心を抱いている。しかし友人たちに誘われたパーティの席上、街から来た少女ジュリアに、田舎の少女にはない魅力を感じ、一目見て恋をする。彼女の方でも彼に惹かれていたことがわかると、二人は結婚することになる。

ジュリアに会いに街に行った帰り、ジョゼフは列車でフィリップという、彼よりも少し年上の男性と知り合う。会うやいなや彼に惹かれ、ジュリアとの結婚の是非をめぐって相談したり、同性の愛情に関する議論をしたりする。結局彼は結婚するが、結婚してみると、ジュリアは彼よりも随分と年上で、しかも

金欠に苦しむ実家を助けるために彼の財産を利用しようとしている側面が見えてきて、ジョゼフは結婚の失敗を思わないではいられない。

ある時、ジョゼフとジュリアは喧嘩をする。その時、以前ジョゼフが好意を持っており、また実は彼に密かに好意を寄せていたルーシーが訪ねて来ていた。常々ジュリアの策略や見せかけの愛情にうんざりしていたジョゼフは、「ボクは仮面にはうんざりなんだ」(304)と叫んでしまう。ショックで自室にこもり出てこないジュリアの様子を見に行ってみると、彼女は砒素を飲んで死んでいた。

当初はジュリアが夫に嫌われたことを苦に自殺したと考えられたが、彼女の死の直前、ジョゼフがルーシーと会っていたことがわかってくると、ジョゼフによる殺害ではないのかという疑いが生まれてきた。また砒素の入手経路に関しても疑問を持たれた。訴えられる前に自分の方から取り調べを受ける方がよいというフィリップの助言に、ジョゼフは従う。それ以降フィリップを始めとする友人たちによる、ジョゼフの無実を証拠する努力が始まる。

そして迎えた裁判、おとなしいルーシーも自分の評判もかなぐり捨て証言し、フィリップが何とか連れてくることができたため、ジュリアの父の証言も得た。その結果、当時顔色を良くするために砒素を利用する習慣があり、そもそも顔色の悪いのを気にしていたジュリアは砒素を常用していたが、死の当日、ジョゼフの言葉に衝撃を受け、誤って致死量を超えた砒素を服用したための事故であるとわかる。

その後ジョゼフはこのようなことになったのも自分のいたらなさのためであると考え、故郷を離れ旅に出る決心をし、フィリップの妹の助言もあり、フィリップのたどった足跡をたどる旅に出る。しばらくして自分が子供であったことを悟ったジョゼフは故郷に戻ってくる。フィリップは彼の帰郷を喜ぶが、しかしフィリップの妹マデランとジョゼフの結婚が暗示される。それを見て、自分とジョゼフのたどるべき道は別々であり、片一方の性だけでは不完全だと思い、フィリップも結婚を決意する。

以上が作品の粗筋である。妻となった女性の「計略」や「仮面」に気づくことのできなかつた「イノセント」なジョゼフが、フィリップとの出会いを通し、自分自身というものに目覚めていくという、一種の成長物語になっているのだが、その成長が目指した方向と、最後の最後に暗示される二人のそれぞれの結婚という将来との間には、埋めることのできない溝があると感じられる。そこがこの作品の問題であると思う。

II

そもそもテイラーは、同性愛的な傾向の作品を残していたことで、かなり前から注目を集めていたらしい。ゲイ・スタディーズが盛んになる前、1964年に書かれたエグリントンの『ギリシャの愛』に、「19世紀におけるボーイ・ラブ」と題した章があり、その中でホイットマンと同時代の作家として、詩人テイラーの名前が挙がっている。⁴ ロバート・K・マーティンが『アメリカ詩における同性愛の伝統』で書いた、「テイラーは旅行記という記述方法を取ることで、ターキッシュ・バスや、ハッシッシ吸飲、踊る少女、酔っぱらいのドンチャン騒ぎ、かわいいアラブの少年を、検閲されるという恐怖を感じることなく描くことができた。彼は単に異国の習俗を報告しているだけなのだから。このように、彼の旅行記は初期のポルノグラフィと同じと言っても良いような機能を果たした。科学の偽装のもとで、エロティックな刺激を提供した」という評価は、⁵ 間違っていないだろう。

彼が旅行記作家として活躍したのは1850年代であるから、もちろん露骨な描写があるわけではない。しかしターキッシュ・バスの描写などは、なかなか興味深い。話が逸れるが、引用しておこう。芸術論のように書かれている描写の背後にエロティシズムが見えてくる。

The bath is the “peculiar institution” of the East. . . . but the bath, that sensuous elysium which cradled the dreams of Plato, and the visions of Zoroaster, and the solemn meditations of Mahomet, is only to be found under an Oriental sky. The naked natives of the Torrid Zone are amphibious; they do not bathe, they live in the water.⁶

The brown sculptor has now nearly completed his task. The figure of clay which entered the bath is transformed into polished marble. He turns the body from side to side, and lifts the limbs to see whether the workmanship is adequate to his conception. His satisfied gaze proclaims his success. A skillful bath-attendant has a certain aesthetic pleasure in his occupation. The bodies he polishes become to some extent his own workmanship, and he feels responsible for their symmetry or deformity. He experiences a degree of triumph in contemplating a beautiful form, which has grown more airily light and

beautiful under his hands. He is a great connoisseur of bodies, and could pick you out the finest specimens with as ready an eye as an artist.

I envy those old Greek bathers, into whose hands were delivered Pericles, and Alcibiades, and the perfect models of Phidias. They had daily before their eyes the highest types of Beauty which the world has ever produced; for of all things that are beautiful, the human body is the crown. Now, since the delusion of artists has been overthrown, and we know that Grecian Art is but the simple reflex of Nature — that the old masterpieces of sculpture were no miraculous embodiments of a *beau ideal*, but copies of living forms — we must admit that in no other age of the world has the physical Man been so perfectly developed. The nearest approach I have ever seen to the symmetry of ancient sculpture was among the Arab tribes of Ethiopia. Our Saxon race can supply the athlete, but not the Apollo.⁷

さて、『ジョゼフと友達』だ。この作品には「男の女への愛同様、男の男への愛の真実と思いやりのある愛情を信じる（中略）人々へ」（ii）という言葉を含むエピグラフが付いている。読者はその言葉を念頭に置いて読み進めるわけだから、男性同士の肉体的な接触には敏感になっても仕方がない。初めてジョゼフがフィリップと出会う列車のなかの場面で、ジョゼフはフィリップの肩にもたれかかって眠りにつくという描写があるが、実はこの二人、何かあると「肩に手をやる」とか「手を取る」といった表現で描かれ、二人の肉体的接触が強調されている。この手をめぐる議論に関して、実は興味深い見解がある。同じく詩人である友人リチャード・ヘンリー・ストダードがテイラーに詩を捧げたそうだが、その献辞のなかで書かれた言葉をめぐる議論だ。

Stoddard had dedicated his *Poems* to Taylor in 1852, and in his dedication he asked Taylor to “join our hands, / And knit our souls in Friendship’s holy bands.” As Martin points out, “holy bands” inevitably recalls “holy bonds” of wedlock, which suggests that “Stoddard is establishing a model for friendship (which he Platonically capitalizes) that will be parallel to, and perhaps even superior to, the love of man for woman.”⁸

私がここで繰り返す議論にこれを直接当てはめるには多少の無理があるとしても、この作品での二人の体の接触に同性愛的なニュアンスを読み込む方が自然であるのは明らかである。その意味でも、最も注目すべき場面は、ジョゼフが結婚し、その結婚が破局に向かう時期、彼がフィリップに相談に行った場面で見られるものだ。

“Yes, we will wait,” said Philip, after a long pause. “You came to me, Joseph, as you said, in weakness and confusion: I have been talking of your innocence and ignorance. Let us not measure ourselves in this way. It is not experience alone which creates manhood. What will become of us I cannot tell, but I will not, I dare not, say you are wrong!”

They took each other's hands. The day was fading, the landscape was silent, and only the twitter of nesting birds was heard in the boughs above them. Each gave way to the impulse of his manly love, rarer, alas! but as tender and true as the love of woman, and they drew nearer and kissed each other. As they walked and parted on the highway, each felt that life was not wholly unkind, and that happiness was not yet impossible.(217)

この場面を読んで、男同士のキスシーンに単なる友情しか感じなかったとしたらどうかしているだろう。さらに、妻殺しというジョゼフへの嫌疑が無事晴れた後、ジョゼフとフィリップのことを描く場面にも同様の言葉が見られる。

Meanwhile, Joseph and his guests sat on the veranda, in the still, mild air. He drew his chair near to Philip's, their hands closed upon each other, and they were entirely happy in the tender and perfect manly love which united them. (340)

ここでは「優しく完全なマンリイな愛」というフレーズに注目したいのだが、この文脈で見ると、男らしい愛とは、ホイットマンの描くようなホモエロティックな愛情を指しているだろう。「手」を重ねることでその愛を成就するかのようには描かれているのである。テイラーの比較的最近に書かれた唯一の評伝の作者ポール・C・ワーマスも、「マンリイ・ラブ」というフレーズに注目し、ホイッ

トマンを連想させると書いている。⁹ ちなみにホイットマンがこの「マンリィ・ラブ」というフレーズを用いている箇所はいくつかあるようだが、その中で有名なものは「カラムス」詩編の「君、デモクラシーに」であり、次のようになっている。「仲間の愛」を「仲間のマンリィな愛」と置き換えているわけだから、仲間同士互いにマンリィな愛を持つことになり、従って「男らしい愛」はまた「男の愛」、「男の間の愛」となっていく。

COME, I Will make the continent indissoluble,
I will make the most splendid race the sun ever shone upon,
I will make divine magnetic lands,
 With the love of comrades,
 With the life-long love of comrades.

I will plant companionship thick as trees along all the rivers of
 America, and along the shores of the great lakes, and all over
 the prairies,
I will make inseparable cities with their arms about each other's
 necks,
 By the love of comrades,
 By the manly love of comrades.

再々引用することになるが、ロバート・K・マーティンが書いているように、¹⁰ この作品では同性愛者の生きる権利を擁護していると取ることのできる発言がある。フィリップが採鉱をしていたときのことを話し、「ロッキー・マウンテンでの生活で学んだ良いことの一つなんだ。高級でも低劣でもなく、知識があるってわけでも無知ってわけでもない。ただ集まってくる男たちの必要に当てはまるものがあるだけなんだ。だから多くの男が持っており、生涯かかって求める必要なものがあるんだよ、だってある特定の形でその必要が満たされることを願うからね」(95)と語る。後に述べる言葉にはさらに明確な主張が込められている。

“Is there no way out of this labyrinth of wrong?” Philip exclaimed. “Two natures, as far apart as Truth and Falsehood,

monstrously held together in the most intimate, the holiest of bonds, — two natures destined for each other monstrously kept apart by the same bonds! Is life to be so sacrificed to habit and prejudice? I said that Faith, like Law, was fashioned for the average man: then there must be a loftier faith, a juster law, for the men — and the women — who cannot shape themselves according to the common-place pattern of society, — who were born with instincts, needs, knowledge, and rights — ay, *rights!* — of their own!” (214)

「ありふれた世間の型に従って自分たちを形成できない」者とは同性愛者のことだろう。それ故、ここでは、「ありふれた世間の型によって自分たちを形成」できる者、つまりいわゆる異性愛者とは別の生き方にも真実が存在することを主張しているわけである。

フィリップは自分たちにとっての真実が存在する理想郷を夢見たのかもしれない。ジョゼフが自分の結婚のことでフィリップと話しているときに、「もし君がもっとすばらしい世界を知っていたなら、たとえ君の知識の一部が邪悪のものであっても、この致命的な結婚から逃れることができたのに」(215) とフィリップが言うと、ジョゼフはフィリップの言葉を全面的に受け入れたいという希望を、「ボクは君の言葉に大きな誘惑を感じるんだ。その言葉に従えばボクの鎖は切れ、ボクの過去、現在の生活からはスパッと別れることができ、意志と本能的欲望に身を任せることができる。ああフィリップ。もしも僕たちの人生を完全に僕たちだけのものにすることができたらなあ。もしボクが場所を見つけることができたなら」(215) と、熱烈な言葉で応じる。すると即座にフィリップが「そのような場所なら知っているよ」と答え、「一緒に行こうよ」とまで言う(216)。そこは「谷」であるという。妻殺しの容疑が晴れ、フィリップの辿ったところをめぐる旅に出て、ジョゼフが発見するのこの「谷」である。

... a great valley, bounded by a hundred miles of snowy peaks; lakes in its bed; enormous hillsides, dotted with groves of ilex and pine; orchards of orange and olive; a perfect climate, where it is bliss enough just to breathe, and freedom from the distorted laws of men, for none are near enough to enforce them! If there is no legal way of escape for you, here, at least, there is no force which can drag you back, once you are there. (216)

どうやら同性を愛する者たちの楽園を暗示するかのようなこの「谷」に関し、フォーンはホモエロティックなテキスト特有の主題を指摘し、その一つに「同性愛の男性が安全に自分たちの愛を表明し実践できるユートピア世界の記述がある」と述べ、この作品をその伝統に位置づけている。¹¹

フィリップが現実に存在するものとして語る「谷」ではあるが、語られるその世界は、どうも「神」と結びつき、「上」に位置するように思われる。例えば、ジョゼフが「私たちは私たちの人生を私たちの下にあるのではなく、上にある法則に従って形成しなければならない」(228) と言い、一方フィリップは、「ボクたちは別れてはいるけれど、二人の魂が同じように明るく暖かくお互いに向かって開いているのがわかるんだ。そして神への道は男の愛に通じていると感じるんだ」(353) と述べる。まるでイデアの世界を目指すプラトンのようですらある。

「谷」を発見したと報告した後、ジョゼフはこんな言葉を加えている。

Yes, but we will only go there on one of these idle epicurean journeys of which we dream, and then to enjoy the wit and wisdom of our generous friend, not to seek a refuge from the perversions of the world! For I have learned another thing, Philip: the freedom we craved is not a thing to be found in this or that place. Unless we bring it with us, we shall not find it. (355)

幸せの「谷」の存在を自分で確認した上でこのように語るのを聞けば、その自由を携えて今生きている世界で生きていくのかとってしまうが、ところがそうではない。

作品の最後はフィリップの独白で終わる。独白の直前、フィリップはジョゼフが自分の妹のマデランといふのを目撃し、二人が親しくなると決めつけ、自分が将来の生活と思い描いていた、「マデランが家を作りボクのためにピカピカにしてくれ、ジョゼフがボクに男の愛マンズ・ラブという貴重な親交、女の愛とはまるで違うが、とても純粋で完全な愛を与えてくれる」生活を、二人が破壊し、しかし、「どちらの性も片一方では不完全であり、人の完全な生活こそボクのものとなるのだ」という決意と共に、自らも結婚を決意する。(360 - 61)

Ah, you unconscious lovers, you simple-souled children, that know not

what you are doing, I shall be even with you in the end! The world is a failure, God's wonderful system is imperfect, if there is not now living a noble woman to bless me with her love, strengthen me with her self-sacrifice, purify me with her sweeter and clearer faith! I will wait: but I shall find her! (361)

フィリップが見いだし、ジョゼフも存在を確認したのだから、幸せの「谷」はそこにあったはずだ。なのに知らず知らずの内に遠ざかって行き、最後にはフィリップの独りよがりと思われる結論で、幕を閉じている。しかし、結婚を失敗に至らせることになった囚われていた状態から目覚め、実は求めていた「友愛」の世界を発見するのであれば、その世界へ一挙に旅立つことを読者が期待しても無理はない、そういう論理展開であるはずだった。その意味で、この作品は、少なくとも現代の読者の期待を裏切るものである。しかし、最後の土壇場で裏切るのかというと、実はそうではない。その点こそがこの作品の興味深いところなのだ。

III

この作品に用いられる言葉のなかで、「イノセンス」と「マンリィ」は重要だ。何故重要かということ、同じ言葉が持ちうる異なる意味を、最大限に作者が利用していると思われるからである。

「イノセンス」はこの作品中、「純潔」、「無邪気」、「無知」、「無実」と、この言葉が含意する様々な意味で用いられているように思える。しかもこの言葉はほとんどの場合、ジョゼフを形容する言葉として用いられている。例えば友人のエルウッドはジョゼフを評し、「彼は一歳の赤ん坊のようにイノセントだ。ジョゼフ・アスタンほどいい奴はいない。でも彼の育ち方は男の子というより女の子にピッタリだ」(48)と評する。この言葉などは「純潔」、「無邪気」と解釈できるだろう。しかし、「もしも彼がそれほどイノセントでなければ、もしも外部に現れた自己に意識過剰であるほど自分の内面の本性に無意識でなければ、彼の思いがジュリア・ブレッシングではなくフィリップ・ヘルドに向かっていたと気づいていただろう」(96)という箇所では、むしろ「無知」の意味で用いられている。さらに、ジュリアの「仮面」にだまされたと悟ったときのジョゼフは、自分が今まで「イノセントに、イグノラントに」生きてきたと語り、自分で自分の無知を認める。そして裁判の場面になると、ジョゼフの友人たちが、「み

んなで彼のイノセンスを確立せねばならない」(300)と、「無実」の意味で用いられる。

さらに言えば、ジョゼフのイノセンスは多くの登場人物によっても確認される。まずは彼の死んだ母。続いて育ててくれた叔母。友人のエルウッド。妻ジュリア。そして最愛の友人フィリップ。何よりも、彼は自分自身をイノセントと規定している。

彼の「無実」が確定した後、ジョゼフは旅に出たが、「谷」を見いだす前、こんな内容の手紙をフィリップに書き送っている。

One weakness is left, and you will understand it. I blush to myself, — I am ashamed of my early innocence and ignorance. This is wrong; yet, Philip, I seem to have been so unmanly, — at least so unmasculine! I looked for love, and fidelity, and all the virtues, on the surface of life; believed that a gentle tongue was the sign of a tender heart; felt a wound when some strong and positive, yet differently moulded being approached me! Now, here are fellows prickly as a cactus, with something at the core as true and tender as you will find in a woman's heart. They would stake their lives for me sooner than some persons (whom we know) would lend me a hundred dollars, without security! Even your speculator, whom I have met in every form, is by no means the purely mercenary and dangerous man I had supposed.

In short, Philip, I am on very good terms with human nature; the other nature does not suit me so well. (350)

この中で、自分の「イノセンスとイグノランスを恥じている」とある。彼が本当に自分のイノセンスに気づき、それからある意味で脱却できたのであれば、先程引用しておいたイノセンスの少なくとも一つの方向、つまり、自分の中の本当の性質に目覚めるはずである。目覚めるとすれば、フィリップを選ぶはずなのだ。ところが結果は知っての通りであり、しかもその結果を語るのは、実はジョゼフでも三人称の語り手でもなく、選ばれるはずだったフィリップなのである。ここには明らかに作者の意図がある。

今の引用にも見られた「マンリィ」という言葉に、今度は注目しよう。この言葉は前にホイットマンを彷彿させるといって紹介した「マンリィ・ラブ」と

いうフレーズで用いられていた。この場合、「男性同士の」とむしろ訳したいくらいだ。また、ジュリアとの関係が悪化し、彼女に反論するときにはジョゼフは、「ボクにはもう一つ別の面があることを忘れないでくれたまえ、マンリーな自尊心だ」(257)と言うが、このときは「男としての」と訳しておこう。そして、先程引用したフィリップへの手紙では、「アンマンリィ」を「アンマスキュリン」と自分で置き換えている。この場合は「男らしい」であろう。

少し時代が下るが、エドワード・プライム・スティーンソンというアメリカ人が、ザビア・メインという偽名で出版した『イムレ：覚え書き』(1906)などにおいても、男性の魅力がやはり「マンリィ」という言葉で語られる。¹² この作品は、女っぽい男との間にしか同性同士の愛情が存在しないことを嘆いていた主人公が、同じように男っぽい男性同士の愛情の存在を確認するという物語で、ロジャー・オースティンによれば、「これまでに知られている限りで、同情的で明確なゲイ・ノベルを最初に書き出版したアメリカ人男性」による、その最初の作品である。¹³ ホイットマンにおいてもそうであるが、「マンリィ」とは、「男らしい」であると共に「男性同士の」である。従って、「男らしい」「男性同士の」愛情こそが理想の愛情なのである。ところがその意味で、テイラーの場合、「男らしい」には時として「男性同士」のニュアンスをわざと欠落させる用い方がされている。

怒ったジュリアがジョゼフにいう言葉に、「いいこと、フィリップ・ヘルドはね、あなたのあの友達、英雄、おそらくはあなたの美德と性格の鑑であり、マンリィで高貴そのもののあのフィリップ・ヘルドはね、いい、ミセス・ホープトンにぞっこんなのよ」(165)というものがある。マンリィなフィリップが女性に恋をしていると述べることで、「男性同士の」というニュアンスをはずし、「マンリィ」であれば対象を女に求めるはずだという前提が持ち込まれている。「男らしい」「男性同士の」という二重の意味の上で成立する「マンリィ・ラブ」を、どうもテイラーは成立させつつざらしているように思えるのである。

今までに見てきた二つの言葉とは違いますが、似たような意味のずれを示す例をもう一つ挙げよう。この作品の題は『ジョゼフと友達』である。「友達」は単数形で書かれており、エピグラフにあった「男の男への愛」の対象を意味すると考えられる。最初はエルウッドを指すことが多かったが、出会い以来、作品の途中、ジョゼフの裁判の場面あたりまでは主にフィリップを指しており、従って単数形が用いられていた。しかし裁判の場面以降、この「友達」という言葉は複数形で用いられることが多くなり、その中にはルーシーやマデランなど女

性も含まれていく。特定の一対一関係を示していた言葉が意味の変化を受け、不特定の関係を示す言葉になっていく。

今まで見てきたように、この作品でキーワードになりうる語は、使用されていく過程で、意味が収斂し、明確なイメージを結ぶ方向には進まず、むしろ拡散していき、そもそもの意味すら解体していくような使い方がなされている。

オースティンが指摘するように、¹⁴ レスリー・フィードラーは『アメリカ小説における愛と死』の中で、「しかし結局のところ、男性性対象倒錯への激烈な否認がその本当の性質への無知を促進した。同性愛の「罪」や「犯罪」は最も下卑た肉体的な用語においてのみ想像され、その結果、ダンテのベアトリーチェに対するような、(もしくはシェイクスピアの貴族的な少年に対するような)抽象的で成就していない愛は非常にお上品な人には申し分のないものに思えた。事実母親たちは、息子たちの間の『害のない』ロマンティックな執着を、肉の誘惑への防御物と考え喜んだものだ。誘惑に負ければ性病が全く望ましくない下層階級の少女の妊娠につながるからである」と書いているが、¹⁵ 「促進」されるべき「無知」を、ティラーはまるで利用しているかのような描き方なのだ。

ここで考え得る仮定は二つある。読者の無知を利用して、実はホモエロティックな関係を描けるところまで描いたというものと、その逆に、ホモエロティックな関係を描くことだけが本来の目的ではないという安全弁をつけておきたかったという二つである。ただ少なくとも言えることは、用語の混乱と思えるこの描き方は、実は最後に唐突に語られる結婚の暗示を、実は準備しておくことでもあったということだ。これがティラーの意図したものであるとすれば、最初に紹介したように、ホイットマンが彼の詩に「間接的」な描き方を見いだしたと言った言葉にも、ある程度以上の納得がいく。

ティラーの小説の処女作は『ハンナ・サーストン』(1864)である。この作品は女権運動家の女性が最終的には女権運動の価値を認めない男性と結婚し、自分の主張を捨てる物語と言ってもいいだろうが、ホーソーンに評価されたらしい。¹⁶ 実は「マンリィ」もしくは「マンフッド」という言葉を考えるとき、この作品がとても興味深い鍵を与えてくれる。

粗筋は省略するが、主人公のハンナがマックスという男の求婚に最終的に応じ、彼に恋をすることが自分の信念を捨てることになるという発言をし、事実上今まで信じてきたことをまるで捨て去って彼との結婚を選ぶかのような決断をすると、「その一瞥において、マンフッドの強い魂がその女性と直面し征服した。彼は自分の勝利を見て取ったが、見て取ったことを表に出さないよう覆い

隠し、彼女が怯えないように勝ち誇った幸福感を抑えた」とあり、¹⁷ 女性に恋はするが打ち負かすのは男性であるという、いわゆる男性的な性質を、どうやらマンフッドという言葉で表しているのがわかる。しかも、彼女の女権運動への信念喪失に追い打ちをかけるように、結婚後、昔の同士から女権運動の演説を依頼された折、すっかり信念も自信も失った彼女は、夫マックスの提案に従い、彼が代わりに行くことを了承するのであるが、その夫の演説に関してこのように書かれている。「彼は妻との間でかわしていて私たちもすでに聞き知っているあの同じマンリイな見解を繰り返した」(452)

男であることに、いかに作者がこだわっていたかこの作品を読むとよくわかるのだが、ここで用いられる「マンリイ」という言葉には、「マンリイ・ラブ」というフレーズにおいて見ることでできた言葉のニュアンスは感じられない。

IV

今までに見てきたような曖昧さ、もしくは混乱は、実は作者自身の心を反映している可能性は拭えない。つまり、結婚というヴェールで偽装してホモエロティックな関係を描くことが目的であるとすれば、執拗に結婚につながるような言葉の意味のずれを作品に持ち込むこともなかっただろうし、逆に最終的には結婚するのが正しいと本当に信じていたのだとすれば、なにやら恨み辛みを述べた後でジョゼフと妹の結婚を最後の最後にポロツとフィリップに暗示させるというようなラストにするのではなく、ジョゼフが、そして時折顔を出す作者自身、もしくは「私たち」という語り手に、客観的な事実として結婚を示させても良かったわけだ。このどっちつかずの描き方は、何かを意図的に隠そうとする姿勢に思えてならない。

テイラーは25歳の時、幼なじみの恋人メアリー・アグニューとの結婚を経済的な基盤ができるまでと延ばし延ばしにしていたが、病気を患っていた彼女の様態が思わしくなく、先が長くないと危ぶまれたため、せめて数日でもテイラーの名前になりたいという彼女の最後の願いに応じて結婚している。¹⁸ 彼女は結婚後間もなく他界する。テイラーはその後も各地に旅行するが、その旅先で出会い、アフリカ旅行を共にしたオーガスタ・ブフレブという年上のドイツ人男性に関し、テイラーが書き記している手紙の内容は本当に面白い。実は二度目の妻マリー・ハンセンはこの男の姪であり、彼を通して知り合っている。最初の妻の死、年上の男との友情、そしてその男を通して知り合った女性との結婚。なにやら『ジョゼフと友達』の筋立てと似ていないだろうか。

テイラーは旅先から母に宛て、手紙を再々書いているが、その中のいくつかの手紙にこの男について記している。まずは1851年12月3日付のもので、その男性が「裕福なドイツ人地主であり、45歳、体重は220ポンドあり、どこをとってもボクとは正反対」と言った上で、次のように続けている。

But a more honest, manly nature, a warmer and more generous heart, I never knew. I love the man like a brother, and it will be a sore trial to part with him. His companionship and sympathy have strengthened me for the whole of my journey. . . . I do not think two such happy and harmonious travelers were ever on the Nile. If he had not a wife at home, he would go with me to the White Nile, to Palestine and Nivebeh.¹⁹

同じく母に宛てた1851年12月11日の手紙では、「数日したらお別れだねという話をすると、二人の目に涙が溢れてきた」とまで報告し、²⁰ さらに1851年12月19日の手紙では、この男がどんなことをしてくれたのか、事細かに描き出している。その上で、彼に自分の写真を見せると、彼が泣き出してしまい、別れ際にもう一度その写真を見せてくれと言ったと書いている。「彼はなだめるように、だけど慰めを与えるわけではなく、どんな風にボクに話せばいいのか熟知していたので、今までと比べボクは強くなったのだと感ずるのである」と続け、さらに彼との再会を約束したことを記している。²¹

この日付の手紙には、編者（二人の内一人はテイラーの妻、ブフレブの姪である）による注が付いていて、ブフレブが自分の妻に書いた手紙が紹介されており、「輝かしい若者なんだ。君がいなかったら彼と一緒に行ってしまっていたよ」とブフレブの側でも書いているのである。²²

この手紙の内容もさることながら、こういった手紙を母に書き送っていた事実はどうだろうか。実は『ジョゼフと友達』で、ジョゼフと母との関係に触れた部分は、なにやら暗示的だ。

The rigid piety of Joseph's mother was warmed and softened by her tenderness towards him, and he never felt it as a yoke. His nature instinctively took the imprint of hers, and she was happy in seeing so clear a reflection of herself in his innocent young heart. She prolonged his childhood, perhaps without intending it, into the years when the

unrest of approaching manhood should have led him to severer studies and lustier sports. Her death transferred his guardianship to other hands, but did not change its character. (22-23)

実はこの引用のすぐ前の部分、母の愛のような愛であまりに愛されると、「本当のマンリィネスに備える出会いから後込みする」とある。小説中の言葉と現実の作者の言葉を混同するのは問題ではあるが、「マンリィ」な男と出会ったことを喜ぶテイラーと、母の愛によって「マンリィネス」に至る術を失っていたジョゼフとの間に、ある種の共通項を見いだせるだろう。この作品の問題は、実はこの作者と作中人物の距離の問題なのかもしれない。さらに言えば、その距離というものを十分に知った上で、作者がそれを利用していたと言っても良いだろうか。

またさらに、当時の親しい友人ジョージ・ポーカーに宛てた 1852 年 4 月 4 日付の手紙にもこんな風に記している。

I think I spoke to you, in my note from Assouan, of my German fellow = traveler, to whose sympathy and noble nature I owe the best part of my enjoyment of the Nile. I find here two letters from him — letters so full of devotion to me and care for my safety that I have been strangely affected by them. His wife also writes to me the most sweet and beautiful of letters, thanking me for my friendship towards her husband. It is a new phase of human affection, which I have never known before. As I said, he is a man of fifty, proud and self = willed, and accustomed all his life to wealth and authority. But he clung to me with a love like that of woman. He had no secrets for me; all his past life, good and bad, was revealed to me. I looked into the recesses of his nature which he had never before exposed to the eye of another. He entered into my sorrow as if it had been his own, and wept, as a mother might have done, at the recital of my history. In these letters which I have received from him, he asks me the same questions which you have asked, and begs me, if I have not found peace, to come at once to him and pass the summer in his house. He says that Nature has no longer an intelligible language to him, since we parted. Have you ever known so remarkable an

experience? I ask myself continually: "How have I deserved this? [""] Certainly not by my mad outcries against the will of God, the justice of Destiny. — With restored health, the joy of mere physical existence is restored to me. The fee life of the Desert, the perfect absence of all restraint or authority, the command I was obliged to assume over my ship or my caravan, the excitement of seeing a wonderful and comparatively unknown country — all these contributed to restore a healthy tone to my nature. My own instincts pointed out to me the right path. Nothing else than these very experiences could have wrought such a miracle, for the resignation which I had only hoped for after many years, is already mine. There are times when the old pang returns, and must ever be, but the great struggle is over.²³

テイラーにとってブフレブとの友情が、「今までに知らない」「人間の愛情の新しい局面」であると規定し、その上で、ブフレブの方がテイラーに「女の愛のような愛でしがみついてくる」とする。しかもブフレブの態度は「母親だったらするような」態度なのである。一方でこの男を「マンリィ」であると言い、もう一方では「母」のような「女の愛」で接してくると言う。

ここまで来れば言っても良いだろう。テイラーは「マンリィ」であることにこだわった。こだわらないではいられなかった。一方で男同士の間の愛情をホイットマンのように「マンリィ・ラブ」という言葉でとらえようともしてみた。とらえないではいられない自分をよくわかっていたからだ。しかし、いくらそう願っても彼の中ではその愛が「マンリィ」となることはなかったのだ。自分にとって本当に愛情を感じることでできる男性への愛も、「マンリィ」であるためにはかなぐり捨てねばならなかったのだ。そういった彼自身の心の中の欺瞞が、この作品に投影されたと考えても良いのではないだろうか。ただあくまでもテイラーがくせ者なのは、ジョゼフの性格付けなどを思いだしてもらえばわかるように、実はこの欺瞞に彼自身気づいて、かなり自覚的に操作しようとしていた可能性が否定できない点である。この作品の語りには、作者の戦略的欺瞞があると言ってもいいだろう。

V

テイラーはホイットマンに、自分の書いた詩を同封した手紙を送っている。

しかしその後二人の関係で私たちに知り得るのは、マーティンが教えてくれるように、「1876年にテイラーは『トリビューン』紙にホイットマンを攻撃する連載記事を書いた」事実と、²⁴ 1877年3月23日に友人ポール・ハミルトン・ヘインに宛てた手紙の中で、「先日、通りを歩いていたらウォルト・ホイットマンに出会ったが、とても元気そうだった。彼の崇拜者によって語られる哀れなお話にもかかわらずね」という言葉だけだ。²⁵ これだけの事実から推察すると、「男性同士」の「男らしい」愛をどうやら体現できたホイットマンに比べ、テイラーは二つの意味の狭間に落ち込んでしまったと言えるかもしれない。

註

1. ミシェル・フーコー、『性の歴史Ⅰ：知への意志』、渡辺守章訳（東京：新潮社、1986年）、55-56。ただし、これについては、ホモセクシュアルという言葉が初めて活字として見られるのは、正確には1869年、オーストリア系ハンガリー人翻訳家、Karl Maria Kertbenyによって書かれた二冊の匿名のパンフレットにおいてであると、Byrne R. S. Foneが指摘している。（Byrne R. S. Fone, *Masculine Landscapes: Walt Whitman and the Homoerotic Text* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 1992), 267).
2. Bayard Taylor, *Joseph and His Friend* (New York: G. P. Putnam & Sons, 1870).
3. Fone, *Masculine Landscapes*, 222.
4. J. Z. Eglinton, *Greek Love* (New York: Oliver Layton Press, 1964), 364-405.
5. Robert K. Martin, *The Homosexual Tradition in American Poetry* (Austin and London: U of Texas P, 1979), 98.
6. Bayard Taylor, "Chapter XI: A Dissertation on Bathing and Bodies," in *The Lands of the Sarasen; or Pictures of Palestine, Asia Minor, Sicily, and Spain* (New York: G. P. Putnam, 1855), 149.
7. Ibid., 154.
8. Fone, *Masculine Landscapes*, 223.
9. Paul C. Wermuth, *Bayard Taylor* (New York: Twayne Publishers, 1973), 98.
10. Martin, *The Homosexual Tradition in American Poetry*, 103.
11. Byrne R. S. Fone, *A Road to Stonewall: Male Homosexuality and Homophobia in English and American Literature, 1750-1969* (New York: Twayne Publishers, 1995), 106-07.
12. Xavier Mayne (Edward Irenaeus Prime-Stevenson), *Imre: A Memorandum* (1906; rpt., New York: Arno Press, 1975).
13. Roger Austen, *Playing the Game: The Homosexual Novel in America* (Indianapolis &

- New York: The Bobbs-Merrill Company, 1977), 20.
14. Austen, *Playing the Game*, 3.
 15. Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (New York: Criterion Books, 1960), 346.
 16. ホーソーンに評価されたという事実はとても興味深い。ホーソーン自身、私見によると「隠蔽」の作家であったからである。(本合陽、「女があかす二人の作家—クーパーとホーソーンの場合」岡山大学教養部紀要、第25号、1989年、参照。)
 17. Bayard Taylor, *Hannah Thurston: Story of American Life* (1864; rpt., Upper Saddle River, N.J.: The Gregg Press, 1968), 403.
 18. Wermuth, *Bayard Taylor*, 42.
 19. Marie Hansen-Taylor and Horace E. Scudder, eds., *Life and Letters of Bayard Taylor* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1884), 222.
 20. *Ibid.*, 222.
 21. *Ibid.*, 223-24.
 22. *Ibid.*, 224.
 23. Paul C. Wermuth, ed., *Selected Letters of Bayard Taylor* (London: Associated University Press, 1997), 96-97.
 24. Martin, *The Homosexual Tradition in American Poetry*, 104.
 25. *Selected Letters of Bayard Taylor*, 466.